理論地理学ノート，No.24（2024），64～66

寺阪先生，中村先生の思い出

安　藤　　清

自分が都立大に在籍していたのはわずか3年である．修士課程の院生として2年，研究生として1年である．濃密な時間だった．学校や役所で地理や地理教育にたずさわってきた自分の仕事の土台がつくられた時間だった．その時間の中に，寺阪昭信先生と中村和郎先生がいる．

寺阪先生は修論の指導教官である．千葉大の学部時代の卒論では，消費者行動のようなことをやっていたが，入学早々に，故渡辺良雄先生にコテンパンにしぼられた．それだからというわけではないが，修論で新たなテーマを決めかねていたとき，何をやろうとするのか迷っているなら寺阪先生に相談すれば･･･と，たぶん，当時助手だった杉浦芳夫，中林一樹両先生からアドバイスをいただいた．そのような経緯で寺阪先生の研究室を訪ね，以前から関心を寄せていた地域である輪中を事例に設定し，アプローチの方法として災害のパーセプション研究に取り組むことになった．

授業は，人文地理学の講座とともに，中村先生の地誌学の講座も履修した．修士課程の仲間と「新しい地理学」や地誌について先生の話を聴き議論しながらワクワクしていたことを思い出す．

実のところ，両先生には都立大を離れてからもずっとお付き合いとご教示をいただいた．ここでは，そのことを記し感謝を込めて両先生の追悼としたい．私の人生にとって，両先生とのご縁が深くも長くもあるがゆえに，些末な私事にもふれざるを得ないことをご容赦いただきたい．

修士課程を終えて都立大を離れ，千葉県で教職に就いて県北部の高校に赴任した．修論の余韻を引きずりながら学校で仕事をし始めていたが，災害に対する人間の知覚と行動に関する研究を「もう少し」やりたいと思っていた．寺阪先生はそんな未練がましい私を気にかけて科研費研究のメンバーに加えてくださった．青森県十和田地方で米作農家を訪ねる調査に，先生がついてきてくださったことを覚えている．なんとかまとめた拙稿は「理論地理学ノート'82」に収録された．巻頭で，先生は編集責任者として，この号が環境パーセプションへの先駆的成果であり，グレコ会の成果である翻訳論文を掲載したものでもあると述べられたが，自分にとっても印象深い貴重な機会となった．

また，行動論関係論文の翻訳作業に関わる機会もいただいた．当時，デヴィッド・レイの論文に関心をいだいていたが，それはレイが論じていた場所の個性や人間行動と社会的文脈の関係といったことに，修論のテーマのさらなる展開の糸口を探ろうとしていたからなのだろう．自分の能力や立場も顧みず地理学の方法論にかじりつくことになっていったが，これも得がたい経験となった．この頃は院生時代の延長のように都立大に出入りし，寺阪先生や杉浦先生の指導をずっといただいていたと振り返っている．1985年の夏，古い理学部棟の食堂で寺阪先生と昼食をご一緒しながら日航機墜落事故のテレビニュースを見ていたことを鮮明に覚えている．

10年ほどの学校勤務の後，1991年に新たに始まった千葉県史編さん事務局に配属され，自治体史における地誌編さんにたずさわるようになった．地誌について考えるようになって，あらためて中村先生と頻繁にやりとりをするようになった．自治体史という制約はあっても「地理学が香る地誌」をどうつくれるか，あれこれ考えては中村先生に相談した．中村先生からはいつも変わらぬ丁寧なアドバイスをいただいた．5年後，最初の千葉県史地誌編が刊行されたときには，本巻に添付された「千葉県史のしおり」に「地理学と地誌学」を寄稿してくださった．何人かの地理学者の業績を紹介しながら地誌学の紆余曲折を概説する短いエッセイであったが，それは右往左往しながら編さんに取り組む私や若い事務局スタッフに対するエールでもあったのかもしれないと，今は思う．この仕事の成果として，自治体史の地誌編さんに関する雑ぱくなレビューをまとめたことも喜んでくださり，先生の編著に収録していただいた．

中村先生が日本地理学会会長職を終えられた頃，1999年の秋，千葉県高等学校教育研究会地理部会が県南部の鴨川市で行った創立50周年記念行事に，先生をお招きした．記念講演をお願いし，また記念シンポジウムにも関わっていただいた．講演は「暗記科目からの脱却－地図教育研究のすすめ－」で，

地図が地理学研究に果たす役割や地理教育における重要性と可能性について話された．また「学校の地理における南房総」をテーマに行われたシンポジウムのコメンテーターを務めていただいた．この行事には，都立大の修士課程同期で，神奈川県で教職に就き活躍していた根元一幸さんが，アクアラインで結ばれた両県の交流のために参加し地理授業の実践を報告してくれた．まさに「都立大つながり」の企画であった．

中村先生は，地図が地理の研究や教育に大きな力をもつことを常に話しておられた．その後，先生のご退職の記念に出版された編著には，自分が当時手がけていた地元の水害ハザードマップを収録していただいた．中村先生は，学校で地理を教えるときに支えとなる堅固な足場を探し求めていた自分を，いつも励まし導いてくださっていたと思っている．

喜ぶべきことかどうかわからないが，あるいは覚えていないだけかもしれないが，寺阪先生にも中村先生にも叱られた記憶がない．いつも私の拙い思考による話を聴いてくださり，賛同と応援をいただくこともあれば，別の考え方や方向を示されることもあった．そして，自分の地理に関わる仕事が，両先生にいつでも支えられているという感覚があった．

寺阪先生とのご縁は，時期による濃淡はあったがずっと続いた．自分は，1995 年の春に千葉県史編さん事務局から転出して佐原市（現香取市）の高校に勤務することになり，以後千葉県北東部が生活圏となった．その頃，先生が高校時代の同級生の方々とともに，佐原の街並み散策においでになったことがある．また，先生が編者の 1 人であった「地図で読む百年」シリーズで，佐原市などの地誌を分担執筆する機会をいただいた．先生が大学を退職された頃だったか，2011 年 3 月の東日本大震災直後の 4 月初め，液状化と建物倒壊で大きな被害の跡が残る佐原の街や津波で多くの犠牲者が出た旭市の被災地を，一日一緒に巡検したこともある．思い起こせば，院生の頃はもちろん，先生とは本当にいろいろなところに出かけた．先生の研究や仕事のフィールド，私が関心を寄せている地域や場所など，次々と思い出されてきりがない．2012 年の夏には，教え子である上越教育大の志村喬さんの企画で，家族ぐるみで新潟県村上市周辺をめぐった．のんびりとした旅行ではあったが，先生の観察する姿は研究者であった．

2016 年秋，先生が喜寿を迎えられたときには，ご家族に，志村さんや同じく教え子の五十嵐さん，私が加わってお祝いした．その後も，志村さんと先生のご自宅を訪ね，高円寺界隈でお酒を楽しむことがあった．いつからか，先生のご息女桂子さんが同行して，3 人で東京近傍のまち歩きをするようになり，佐原市街地の伝統的街並みや成田山の門前町を訪ねた．銚子には二度おいでいただいた．2020 年 9 月には，市の文化財担当部局がすすめていた「銚子みなと地区を歩く」モニターツアーに参加され，そのときのようすは市の広報誌に掲載された．まち歩きを終えた後は，必ずお酒と会話を楽しんでご機嫌よくお帰りになった．数ヶ月に一度のまち歩きでお会いするたび，落ち合ってすぐに「先生，お元気そうですね」と声をおかけしていたが，次第に「いやあ，そうでもないんだよ」との言葉が返ってくるようになった．少し歩くペースを落としてほしいと言われたこともある．それでもお元気で，亡くなる前，2022 年の春には船橋市の旧街道沿いを歩き史跡をめぐり，いつもどおり「巡検の打ち上げ」をしてお別れした．

寺阪先生がお元気なら，まち歩きと夕方の酒宴が今でも続いていただろうと思う．ニコニコしながら待ち合わせの場所にいらっしゃる先生の姿を想う．

（元千葉県公立高校教員）

銚子市のまち歩きモニターツアーに参加（2020 年 9 月）

（銚子市「広報ちょうし」令和 2 年 11 月号，p.10 から転載）

文　献

千葉県高等学校教育研究会地理部会編（2000）：『房総地理』第 51 号.

千葉県史料研究財団編（1996）：『千葉県の歴史　別編　地誌Ⅰ（総論）』付録「千葉県史のしおり」千葉県.

銚子市編（2020）：『広報ちょうし』令和 2 年 11 月号.

寺阪昭信編（1983）：『理論地理学ノート'82』空間の理論研究会.

寺阪昭信監訳（1986）：『空間と行動論』，地人書房，332p.

寺阪昭信他編（2003）：『関東Ⅰ　地図で読む百年』，古今書院，127p.

中村和郎編（1997）：『地理学「知」の冒険』，古今書院，206p.

中村和郎編（2005）：『地図からの発想』，古今書院，125p.